

は、sham手術群に比べ下垂体切除群の一時間当たり、mg蛋白当りの活性の低下に統計学的有意差はないが、全体としてラットと同様の傾向を示した。

結論・考察：(1) ラット及びマウス精巣内に腎あるいは顎下腺レニンと免疫学的に類似したレニンが存在する。(2) ラット及びマウス精巣内のレニンはLeydig cellに局限して存在する。(3) 精巣内レニンは下垂体依存性であり、テストステロンの合成、分泌等に関与している可能性が示唆された。

5. 新しいヒト Ia 抗原 TB 23

(輸血部) ○佐竹 正博・十字 猛夫

目的：ヒト Ia 抗原を code する遺伝子座は 6 つ以上存在すると予想されているが、現在までには、その遺伝子産物は血清学的には HLA-DR, MT, MB 等しか確認されていない。B細胞表面上に存在すると予想される他の Ia 抗原を認識する抗血清をスクリーニングするのを目的とする。

方法：ヒト B細胞と単球を標的にした、補体依存性細胞毒試験によって数千の経産婦血清をスクリーニングする。テストパネルの DR, MT 等のタイプと血清の反応を比較して抗血清の特異性を同定する。

結果：抗血清 T3516は、126人中38人、30%のパネルに反応する。陽性のパネルは、DRI の殆ど全員と、DR 2, NJ₃ 8.1のそれぞれ半分ずつであり、MTI short の特異性を示している。この反応パターンは、既に得られている polymorphic なマウスモノクローナル抗体 2つのそれと殆ど一致しており、T3516血清の抗体特異性としての homogeneity を示唆するものである。また我々の成績では、ヒト Ia 抗原には、B細胞と単球の両方に存在するものと、B細胞上のみ存在するものとの 2群に分けられることが明らかである。T3516は、どのパネルの単球とも反応せず、後者のグループに入ると思われる。この群には、既に発表した TB 21, TB 22の抗原があり、T3516の同定する抗原(TB 23と名付ける)はこれらのものと同一遺伝子座の対立遺伝子と考えて矛盾のない成績が得られている。また、T3516の反応を HLA 内の recombinant family でみると、2人の B/DR 組み換え個体において、DR 領域と一緒に反応が分離伝播されており、この抗原を code する遺伝子座が、HLA-B locus よりも centromere 寄りにあることがわかった。

結論：抗血清 T3516により新しいヒト Ia 抗原が同定された。特異性は MTI short で、HLA-D 領域付近の遺伝子に code されているものと思われる。

6. 舌癌の放射線治療成績

(放射線科)

○渡辺 紀子・大川 智彦・後藤真喜子・喜多みどり・関口 建次・池田 道雄

(口腔外科) 扇内 秀樹

(耳鼻咽喉科) 石井 哲夫

我々は1968年から1981年12月までに106例の舌癌症例を経験した。今回はそれらのうちの新鮮例76例を対象とした。男女比は40:26で年齢は25歳から82歳、平均52歳であった。1978年 UICC による TNM 分類によると T₁ 25例、T₂ 32例、T₃ 15例、T₄ 4例、N₀ 63例、N₁ 10例、N₂ 1例、N₃ 2例で初診時頸部リンパ節転移を有する症例は、76例中13例で17.1%を占めていた。初診時に遠隔転移を有する症例はなく、すべて M₀ であった。

治療としては、原発巣に対しては密封小線源(²²⁶Ra 針)による組織内照射を主体とした放射線治療が行なわれ、頸部リンパ節に対しては頸部廓清術を主体とした手術療法あるいは外部照射の併用が行なわれた。76例中29例は最低2年間、局所及び頸部リンパ節が制御されたが、10例は初回治療によって腫瘍制御されず全例2年以内に死亡した。29例は初回治療により一時は局所及び頸部リンパ節ともに完全消失したが、経過中に頸部リンパ節転移を認めた。(うち28例は初回治療から2年以内)。4例には局所再発を認め、その他4例は他病死した。

原発巣の再発は少なく、治療の一次効果としての2年間局所制御率は83.3%であった。

初回再発部位としても最も多く、問題となったのは頸部リンパ節である。初診時を含め全経過中に頸部リンパ節転移を認めた症例は76例中42例で55.3%であった。これらに対する治療法としては頸部廓清術単独9例、術後外部照射が併用されたもの22例、術前照射が併用されたもの2例、外部照射単独7例、不明2例であった。初回頸部リンパ節再発に対しての治療による2年間制御率は45.2%であった。因みに全経過中に頸部リンパ節転移の出現した42例の5年生存率は39.5%で、頸部リンパ節転移を有しなかった34例の5年生存率75.3%と比べ有意に低かった。全体の実測5年生存率は54.3%であった。

質問

(内科1) 竹内富美子

舌癌はタバコ、特に葉巻タバコに関係があると言われていますが、お調べになりましたか？

応答

(放射線科) 渡辺 紀子

調べてありますが、ここにはデータをもっておりません。

7. 家兎リンパ球への紫外線照射による免疫抑制効果

(腎センター外科)

○水口 潤・早坂勇太郎・高橋 公太・東間 紘・阿岸 鉄三・太田 和夫

プラズマフェレーシスを実施するにあたり、すでに産生された患者血漿中の抗原、抗体や抗原抗体複合体を除去すると同時に、抗体産生に関与している患者リンパ球の反応性を減少させ、免疫反応を抑制することも重要な問題である。現在、リンパ球の反応性を抑制する目的で、主にステロイドホルモンやアザチオプリンなどの薬剤が使用され、その有効性が認められている。しかし、その副作用により使用量が制限され、十分な免疫抑制効果が得られない症例も少なくない。

われわれは、リンパ球の反応を抑制する物理的な方法の1つとして紫外線を取りあげ、*in vitro*での紫外線によるPHA反応ならびにMLC反応の抑制効果につき報告して来た。

今回は、ヒツジ赤血球で免疫した家兎を用いて体外循環を行ない、回路中の石英ガラス管を通して $6,400 \mu\text{W}/\text{cm}^2$ の強度の紫外線を照射した。ヒツジ赤血球に対する抗体価の測定ならびにリンパ球のPHA反応、Spontaneous blastogenesisを行ない、紫外線の免疫抑制効果について検討するとともに、末梢血液中の赤血球数、白血球数、血小板数の変動も観察したのでこれを報告した。

質問 (微生物) 吉岡 守正

照射日を第1回SRBC注射日より前に行なった方がよくないか?

応答 (腎外科) 水口 潤

UV照射日は1, 5日目です。UV照射はSRBC投与何日前ぐらいがよいでしょうか?

(微生物) 吉岡 守正

ケースバイケースです。

8. 腎の体外手術6例の経験

(腎センター外科)

○中沢 速和・高橋 公太・東間 紘・光野 貫一・瀧之上昌平・八木沢 隆・本田 宏・須藤 尚美・寺岡 慧・阿岸 鉄三・吉田美喜子・太田 和夫

われわれは、従来腎摘の適応とされていた腎血管病変などに対し、積極的に体外手術を行ない、自家移植

を行なうことにより、腎を保存的に治療するように試みている。

今回、われわれは、当センターにおいて施行された6例の自家腎移植例について検討を加えたので報告する。

症例は5~67歳までの、男子4例、女子2例で、疾患は腎動脈瘤2例、腎血管性高血圧症(腎動脈狭窄)2例、腎結石1例、骨盤腎1例であった。

温阻血時間は4~40分であるが、腎血管病変4例では4~6分であった。血管奇形を含む骨盤腎、炎症の高度な腎結石例がそれぞれ40分、20分と長時間を要した。

総阻血時間30分~270分、平均195分であり、その間の腎の保存は、単純冷却2例、低温持続灌流4例であった。

術後の成績をみると、腎動脈瘤の2例は、合併症もなく、1年以上経過して腎機能は良好で腎動脈瘤も消失している。

移植腎摘は2例に施行されており、1例は腎動脈狭窄の症例で、血圧の降下には有効であったが、移植腎動脈狭窄のため7カ月目に移植腎摘出を施行している。他の1例は、腎結石の症例で、腎盂腎炎をくりかえし、移植腎機能低下のため、1年2カ月で摘出している。

死亡例は1例で、67歳と高齢で、術後急性腎不全となり、24日目に死亡している。

現在、腎の体外手術、自家腎移植は腎動脈瘤、動静脈瘻、動静脈狭窄などの血管病変の他、腎外傷、腎奇形、腎結石、腎腫瘍などに対し適応があると考えられている。

われわれの症例においても、腎動脈瘤などに対し、非常に良好な結果を得ているので、今後、適応を充分考慮し、更に症例を重ねて検討を加えてゆきたいと考えている。

9. 膠原病診断におけるLupus Band Testの意義

(腎センター内科)

○柚木 雅至・佐中 孜・小俣 正子・塚田津夏子・菊池 典子・杉野 信博
(皮膚科) 尾立 冬樹・肥田野 信

Lupus Band Test (LBT) は皮膚生検によって得られた組織片を通常の直接蛍光抗体法により染色し、真皮と上皮の接合部の染色性の有無を検討する方法である。一部の疾患を除いては、SLEにきわめて特異的であるとされているが、その診断学的意義ははまだ確立